特集・横浜の盛り場⑥

盛り場であった伊勢佐木町

横浜盛り場小史

神笠起康

一――はじめに
二――伊勢佐木町の成立
三――震災まで
四――戦争まで
五――焼け跡

一――はじめに

商店街といえるものはいくつもある。鶴見、子安大口、六角橋、白楽、天王町、保土ケ谷、藤棚、弘明寺、杉田、横浜橋通、等々である。ショッピングセンターというと、元町、西口となるのではなかろうか。商店街とショッピングセンターとの明確な差は知らない。語感からである。同様に盛り場というと、私には伊勢佐木町しか浮ばない。

なぜなら、私は南区の日本橋の傍に生れ育った。下町の狭いところだけに伊勢佐木町は我家の庭も同然であった。来客があれば食堂に変った。小学校では、クラスの半分程は遊廓関係の子供であった。楼主の子供、出入りの大工の子、周辺の小料理屋の子、車屋の子等々。震災以後大門はなくなった。でも、大門の傍の誰だれさんの家へ行ってきた等と、言葉の上では生きていた。夏の夕方、伊勢佐木町通りにもコーモリが飛んでいた。

二――伊勢佐木町の成立

徳川幕府により江戸と東海道を守るために、政策的に、長崎の出島同様に、権力によって造成された、神奈川の内「横浜」は、ならず者同志のだまし合いのような商売で発展してきた。居留地の人びとを「ヨーロッパのはきだめ」といったのは英国公使オールコックであり、日本からは一旗組や喰いつめものが集合した。西洋人と日本人の仲を取り持って、利を得ていたのが中国人である。日清戦争までは「お茶場」にみられるように、日本人を使役していた。お茶場には数千人の男女が働いていたという。

横浜ドックでも数千人の男女が働いており、ドックの好不況は横浜を左右するとまでいわれていた。

開港以来、横浜では埋立てに次ぐ埋立てが行われ、家屋、商店、劇場等が建てられていった。山を削るのも、沼を埋めるのも、普請の地固め、全てツルハシ、モッコを用いて人力で行われた。

横浜は城下町ではない。神奈川、保土ケ谷の宿場とも相当に離れていたところにある狭い「出島」と、その地続きの沼地である。

労働力の需要は無限に近い。異人、唐人、日本人という人種差はあるが、士農工商という身分差はない。交通機関としては徒歩しかなかった（又は舟）当時、職場まで徒歩三十分～一時間以内の地が全国から人を集めた。山手地区は異人居住区であり、現在の県立音楽堂から戸部方面は日本側役人の官舎地区であったため、これらの人は、北方・山元町・中村町方面の台地か、戸部・南太田方面の台地に居住するようになる。伊勢佐木町地区はこの両台地に挟まれた沼沢地であった。

少数の富者を除いた大部分にとって、

仕事があって小銭があれば、男なら酒か女、女なら芝居か着物となろう。沿革史によれば「明治三年五月。吉田橋脇より入船町野毛浦迄埋立竣功、之を新街道と云。受負人真砂町（京屋）内田清七、入船町より野毛浦埋立地地固めの為め、葭簀張納涼茶屋、其他軽業、辻講釈、昔噺等の興行を神奈川県裁判所に出願、許可を得て興行す。爾来、納涼遊歩者日々群を成し、麦湯店の流行殆んど埋立地の過半を占むるに至れり」（傍点筆者）。

明治七年七月　麦湯営業者に月税及鑑札料を賦課す。

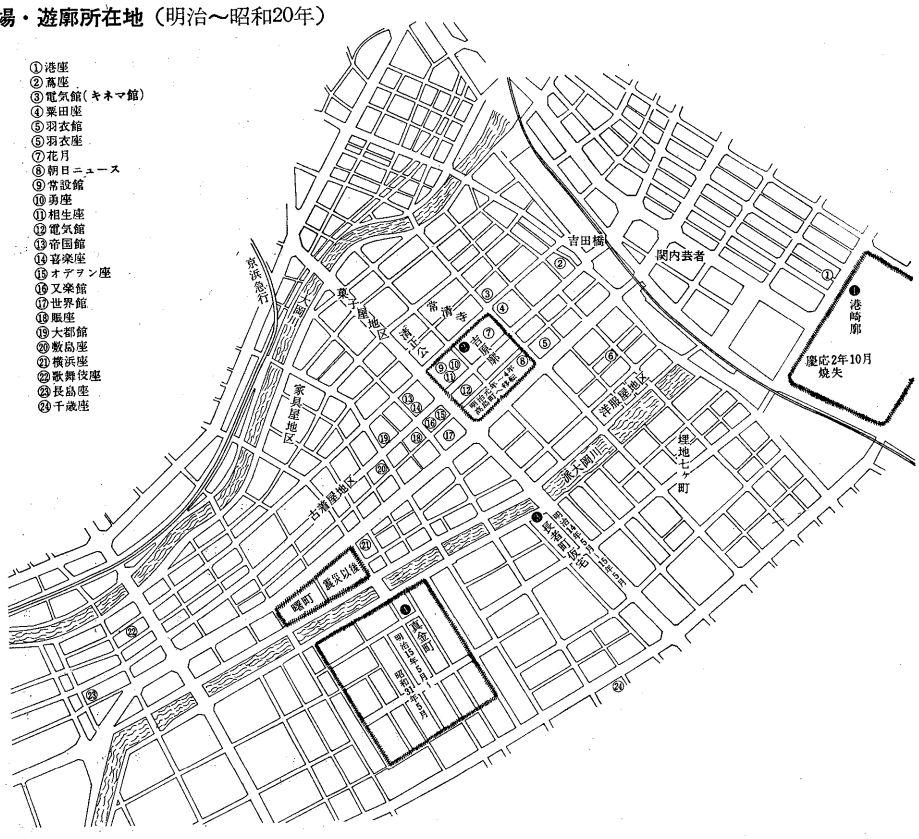
「茶店の給仕女である淫売婦は、千客万来の遊客を拉去って」「冬期も猶若干の居残り店が、かん酒などを提供して、星水る夜半を葭簀張の裡に痴語睦言が聞かれるのであった」「裏地横丁新道に掛けて麦湯と対立し、内実は売春行為を主要の営業とする矢場（揚弓・投扇・座敷鉄砲等の遊興物）が勃興し初め」（以上横浜市史稿風俗篇）。これと対応するように、弁天通三・四丁目の両側に毎晩出ていた露店が、明治七年の春頃から馬車道に移行し、馬車道の露店は電車が引かれた明治三十七年まで続いたという。

明治八年一月　横浜市街、露店営業者に鑑札を下付す。

明治十三年七月に伊勢佐木町が観世物興行地区に指定され、明治十四年十二月十三日、劇場取締規則が制定され、十五年一月一日から施行された。横浜区内は福富町一丁目、伊勢佐木町一・二丁目、松ケ枝町、姿見町、若竹町、梅ケ枝町、羽衣町、蓬莱町、浪花町の九カ町であった。明治十七年四月に小改正があって、明治末迄、指定興行地域制―現在のトルコ風呂も同様―以後は認可制となった。伊勢佐木町の基礎は明治十五年一月一日に定まったといっても過言ではなかろう。同じ明治十五年、高島町にあった遊廓が汽車から目障りになるという理由で真金町に移転する。前面を「麦湯」、後方を「遊廓」、側方を「矢場」と従来から観世物場であった常清寺境内で囲まれた中心部が、劇場街と指定されたわけである。明治十五年二月、伊勢佐木町に芝居小屋賑座、勇座、其他大弓場、観世物場、缶工場、飲食店等建設、数月を出ずして繁華の市街となれり（沿革史）。

真金町遊廓の出現は居留地の異人との関係を進展させた。「外国人銘酒店の分布地帯は、居留地を振り出しに関内に進出し、花園橋・港橋を越えて埋地に入り、さらに真金町・永楽町の異人女郎屋を地理的に連絡し、茲に一脈の系統線を形成し、立飲式の異国情緒豊かなものであった。而して銘酒屋に働く女達も、自然の

図―1　劇場・遊廓所在地（明治～昭和20年）



附帯物として、其必要に促されて存在して居たことは、あまりにも当然である」（市史稿）。伊勢佐木町を経て真金町に至る日本人ルートと山下町方面からの異人ルートの二系統が成立したわけである。

遊廓は終夜営業に近い。附近の飲食店も、そして屋台の軽飲食店も、徹夜営業をする。遊廓へ来る途中で獲物を横取りしようとする「引っぱり」も当然多数出没する。その至近距離に劇場街がある。

明治九年に来日したフランス人、エミール・ギメは、九年の夏、港座（定員一〇六〇人）を見物している。「客は非常に多く、かなり活気を呈している。多くの女性と、年齢に関係なく子供たちもいる」「結末を待たず、人目につかないように外へ出る。芝居は昼に始まり、日の出に終わるはずである」（ボンジュールかながわ）。

劇場取締規則第七条　夜ハ十二時限〔閉〕場スベシ。

「総じて横浜の芝居興行は盛り沢山で幕数多く、観客迎合に努め、役者自身に於ても又、之に甘じて、一人で数役以上を引受けるのが普通であった。従って其所演時間も延びる事は勿論で、午前十時頃から夜の十時、十一時まで演ずるのが普通であった」（市史稿）。「幕合を利用し附近の飲食店にて食事する為、備付の下駄・草履を穿いて、木戸口を出入するものが自然多かった」（市史稿）。

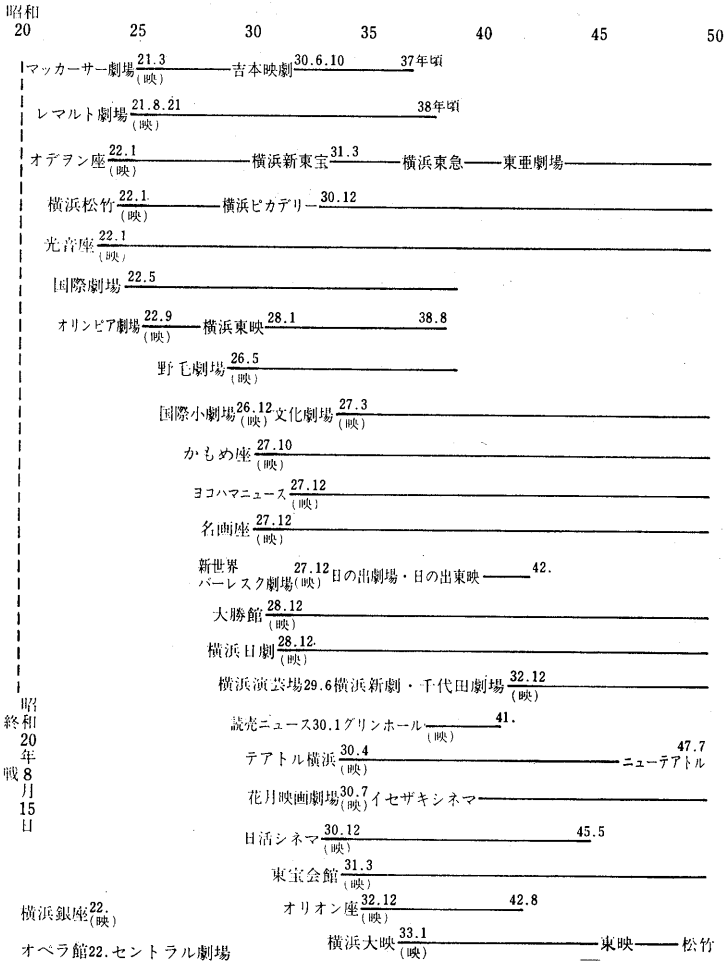
「商店街も一時二時は普通で、中には夜明けまで営業する店もあり、閉店したあとには別な露店が店をあけ、四六時中賑やかな盛業をみせていました」（伊せぶら百年　磯野庸幸氏）

「彼女らは、浜の主体経済の中にいて、稼ぎを競っていた者たちだから、金づかいも荒かった。賑座には、紅黄白紫のハンケチがいつも平土間を埋めてい、贔屓役者に奇声のこもった声援を送っていたものである。中には、なにがしという俳優は、ハンケチ女の専売であるなどと蔭口も平気で客にいわれていた。」「その頃の横浜芝居は、一昼夜といってよかった。朝は午前八時か遅くても九時には開幕する。幕のハネは午後十一時頃になる。その間ぶっ通しだから三番叟から観る客は、朝・昼・晩と三度の食事を芝居の中で食べる人もあった」（吉川英治「忘れ残りの記」）

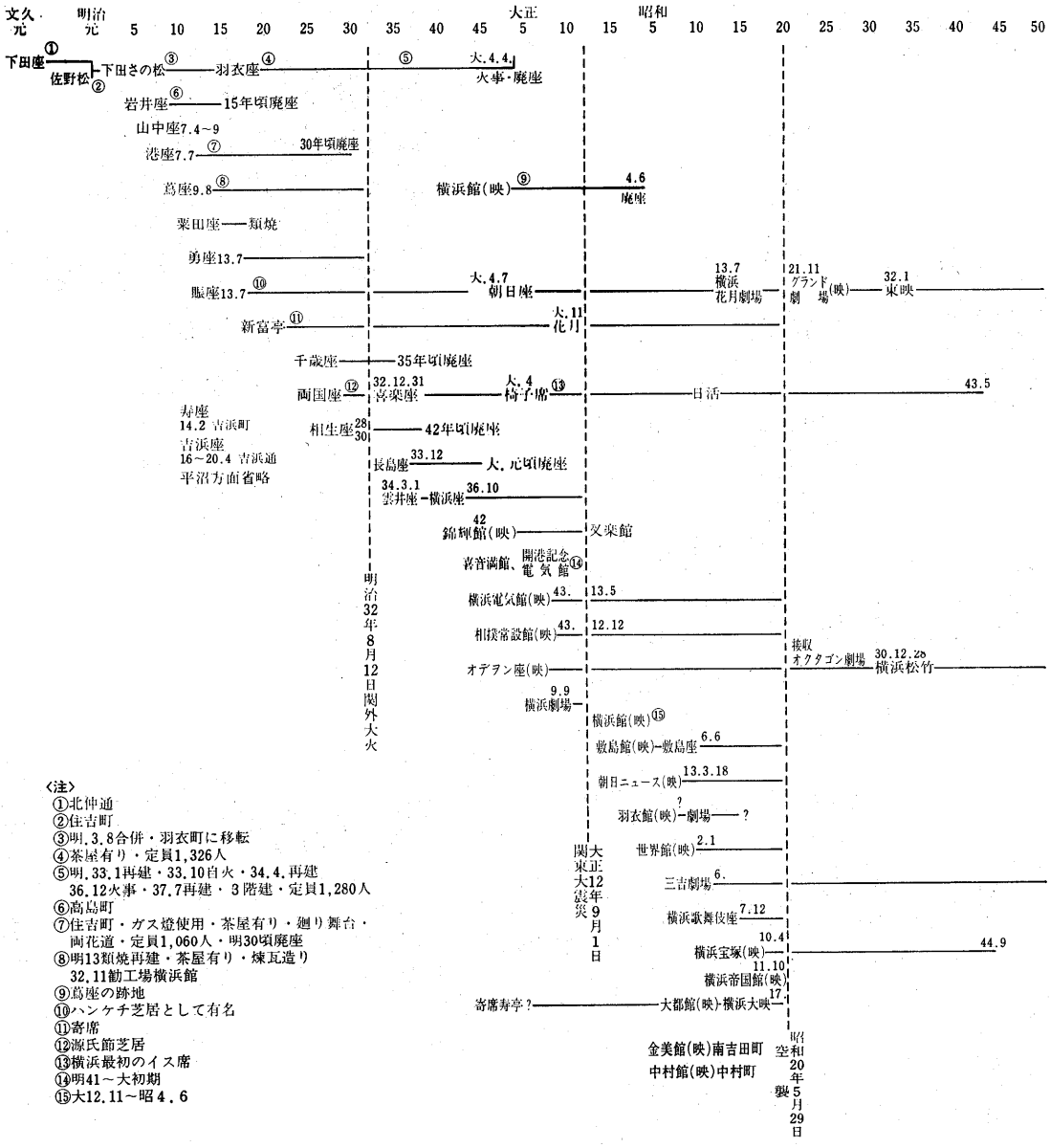
港座、蔦座、羽衣座には「茶屋」があったが、勇座、賑座には無かった。茶屋を利用する客は幕合には茶屋で休憩し、食事も茶屋で料理を食べた。茶屋の便所は手入れが届いていたが、劇場の便所は大変汚れていたという。着かざった御婦人にとっては、茶屋のない劇場は堪え難かったという。

原、若尾、中村等著名な富豪も成立したが、当然、多数の貧乏人も輩出した。当時有名なのは「いろは長屋」「八幡谷戸」「乞食谷戸」の三つであった。明治二十六年十月「斎藤芳次郎が南太田庚耕地に慈善堂という長屋を建て市内の乞食を収容し、正業につかしめた」（タウン誌「浜っ子」）とあるが、現在の清水ケ丘当り、ドンドン商店街の先大原トンネル近くにあった。勿論、現在ではその面影もない。俗に「乞食谷戸」といわれた。「八幡谷戸」は三吉橋の先、山の下の方である。現在は区画整理されてまるで街

横浜・伊勢佐木町附近劇場略年表（戦後できたもの）



表―1　横浜・伊勢佐木町附近劇場略年表



〈注〉
①北仲通
②住吉町
③明.3.8合併・羽衣町に移転
④茶屋有り・定員1,326人
⑤明.33.1再建・33.10自火・34.4.再建
36.12火事・37.7再建・3階建・定員1,280人
⑥高島町
⑦住吉町・ガス燈使用・茶屋有り・廻り舞台・両花道・定員1,060人・明30頃廃座
⑧明13類焼再建・茶屋有り・煉瓦造り
32.11勧工場横浜館
⑨葛座の跡地
⑩ハンケチ芝居として有名
⑪寄席
⑫源氏節芝居
⑬横浜最初のイス席
⑭明41～大初期
⑮大12.11～昭4.6

並も変ってしまった。「いろは長屋」は山元町の裏側にあった。「程近い相沢の町通りへ出るウラに、有名な貧民窟の一画がある。〝いろは亭〟という汚ない寄席の切板の下から狭い横丁のドブ板とそこの屋根全部であった。通称〝いろは長屋〟と呼ばれていた。そこには、どん底生活の百態が軒をならべている。住民はカンカン虫、お茶場女、ナンキン墓の墓番、大道芸人、チーハーの運送屋（シナ風の富籤）、屠殺場のアンチャン、夜蕎麦売り、といったような有職無職の人々である。――すべて、いろは長屋の人々は、始終、生き争う物音の中に暮していて、夏は男女とも真ッ裸同様だし、平気で猥雑な行為は見せるし、どこかの軒では必ず夫婦喧嘩をやっているし、それでいてぼくらには危害を加えないばかりかみな親切なのである。」（「忘れ残りの記」）。この三地区は何れも港から徒歩一時間以内、伊勢佐木町なら三～四十分の範囲にある。

明治二十年十月から横浜市街へ水道の水が引かれた。それまでは、埋立地の人々は水売りの水で生活していたのである。黄金橋傍の雑用水として使われている湧水はこの頃まで水船に積んで港へ売りに出されていた水だという。運河は大量物、米・塩・材木・石炭等の輸送手段

として、欠かせないものであった。米屋、材木屋、石炭屋等の大きな店は、必ず川の傍らにあった。そこには住込みの店員若衆が何人もいた。これらの若衆に「これで遊んでおいで」と真金町等の費用を出してやれる位でないと商家のお内儀さんは勤まらなかった。

こうして、伊勢佐木町を盛り立てる要素が揃った頃、明治三十二年八月十二日に大火に見舞われる。吉田橋傍（松屋―三和銀行があったという）の警察署をはじめ、蔦座、羽衣座、賑座、勇座、両口座等が類焼した。

三――震災まで

大火後、伊勢佐木町は事実上一からやり直した。大芝居は羽衣座だけとなり、小芝居と寄席になる。劇場街の衰退傾向と対称的に真金町は全盛期を迎える。「廓の全盛期は、明治三十年から大正初年に掛けての頃であった。廓から政治が生れ、商談取引も廓から、さては相場師の豪遊などに、政客・紳商の艶物語は珍しくも無かった。――廓に附属の飲食店は、永楽・真金両町の河岸を埋めて、五六十軒を数へた」（市史稿）。伊勢佐木町地区の復興に伴う建築ブーム、そして日露戦争は、男たちを劇場よりもより即物的な遊廓へ向けたのであろう。座敷中に百円札をバラまいたという人もある。

日露戦争の頃から、映画――活動写真が流行り出す。芝居の方では壮士芝居は新派として定着し始め、新劇の動きも出始める。日本は軽工業の国から重工業へ胎動しだす。歌舞伎の世界では白井・大谷の松竹が大きな力を持ってくる。同じ劇場という名でも、芝居の場合は俳優二～三十名、裏方十名以上、表方十名以上最低五十名以上、茶屋がある場合はさらに多くなる。映画の場合は十名内外で可能である。茶屋は別として、芝居では水菓子、幕の内弁当、寿司が「かべす」と称して最低のつきものであったのに対し活動写真館では「おせんにキャラメル、ラムネにあんぱん」となる。

明治三十八年の電車軌道の敷設は、馬車道の露店にも影響を及ぼした。中心地は伊勢佐木町一丁目の亀楽せんべいと興信銀行（現横浜銀行）の横町附近に移動したのである。明治四十一年には横浜最初の映画常設館喜音満館が出来たし、大正四年には喜楽座が横浜で始めての椅子席劇場となった。劇場が衰え、映画館が伸展してきているのが誰の眼にもはっきりしてきた頃、関東大震災が訪れるのである。

なお、明治末から大正にかけて高等船員相手の売春婦が現われた。戸部界わい日の出町附近に小ぎれいな住宅を構へ、辻待の人力車夫を仲介にしていたという（市史稿）。

四――戦争まで

震災は横浜の郊外部を発展させた。埋め立てていない土地の被害は少なかった。でも、伊勢佐木町は復興する。

伊勢佐木町周辺の私娼たちは、いち早く仮設家屋に立籠って営業を開始した。だが、彼女等は黙認公許の観ある「曙町」に酌婦の名義で集結させられる。昭和五年には現在の京浜急行も開通して、より遠くからの人を運ぶ様になった。松屋、野沢屋、鶴（寿）屋、相模屋等の百貨店も鉄筋コンクリートで出来上った。木橋は鉄橋に、焼けた木造校舎は鉄筋コンクリートに、区画整理も大幅に行われ、保土ケ谷の切り通しも出来た。復興景気は伊勢佐木町を賑やかなものにした。

オデヲン座を筆頭として、映画は芝居を圧倒する。通称親不幸通りも繁昌する。新らしい私娼は銘酒屋、新聞縦覧所、囲碁・将棋集会所、しるこや、麦とろ等の小料理屋の名目の下に福富町方面にも根を張る。

この頃、芝居は敷島座と歌舞伎座の二つになってしまった。「花月」は吉本興行の経営なので、エンタツ・アチャコ、高瀬実の「わしゃカナワンヨ」、柳屋三亀松等々を演っていた。この他は殆んどが映画館である。

芝居好きの横浜の婦人は、羽衣座等の大芝居を懐しみながら二つの小芝居に通った。敷島座は日吉良太郎一座が十年以上も専属的に続演していた。「日吉を観に行ってきた」といえば敷島座のことであった。歌舞伎座は三流所の歌舞伎役者が主だった。一階席は五、六人掛けの背もたれのない木製の長椅子。二階席は傾斜のついた板の間で、貸し座布団に坐っていると、何時の間にか前の方へスベって行ってしまう様になっていた。花道の下は通路になっていて、布で囲ってあったため、舞台から花道の下をかがみ乍ら小走りして行く役者がチラホラ見えたものである。日吉良太郎一座は歌舞伎系統であったが「改良演劇」「改良歌舞伎」と称していたように歌舞伎そのものではなかった。主観的に過ぎるかも知れないが、むしろ新国劇的歌舞伎とでもいうべきであったろう。

歌舞伎座と敷島座が、老婆と母とそれに連れられた子供を目当てに泣かせていた一方、吉本の「花月」は職工と若い男たちを相手にして笑わせていた。夜の部では金廻りのよい職工風の男と、一見して判る親不幸通りの女とのカップルが二階席に多かった。インテリがオデヲン座で、ハイカラさんが横宝で、オッサンと

少年店員と子供が電気館や大都館へ行った。活動をみる金がなくても、亀楽煎餅の脇では大道芸人が活躍していた（亀楽ビルの三階はダンスホールで、赤坂や横須賀と並んで有名であったという）。歯みがきや記憶術、バナナの叩き売り等々。野沢屋の前から松屋（現在の松坂屋）の前へかけては、家庭用寿司作り器、万能タワシ、万病に利くザリガニの料理法等々の露天商が出ており、これらの店の間と有隣堂の前に乞食が坐っていた。無料水呑場は松屋の前にあった。オデヲン座前の交番の巡査は若く、相模屋前の交番の方が年配者がいてコワかったし、眼が利いた。一―二丁目で万引きして、オデヲン座の前をパスしてホッとしたところをつかまるのである。

戦時中、水兵が街に溢れたことがある。真金町―曙町では間に合わず、親不幸通りにも行列をつくって並んでいたものだ。真金町では軍人割引があったらしいが……。

戦争が激しくなると千人針を頼む婦人の姿が多くなった。デパートと有隣堂の前辺りに立っていた。寅年の女は歳の数だけ縫えるのでモテモテであった。が、これも防諜上の理由とやらで禁止されるようになった。

警戒警報が鳴ると、興行場では興行を中止し、入場券の半券に判コを押してくれた。これで別の日にまた見る事ができた。蒔田寿司では乾メンライスカレーを売りだした。その次はカイホーメンカレーになった。市民酒場と同様に並んで喰べた。市民酒場では四時から酒を売った。お酒の好きな人は昼間から並んだ。当局の悪口をいったりすると並んでいる私服に引っぱられた。徴用や企業統合による閉店が相次いだが、伊勢佐木町通りでは殆んどの店が営業していた。売る物はロクになかったが……。そして、人々も何かあると伊勢佐木町へ出かけた。出征する夫にかけさせる襷用の布地を手に入れるために泣いて頼んでいる人も含めて。

五――焼け跡

空襲と敗戦と接収とがあっという間に訪れた。伊勢佐木町の大部分は接収されGI用の街になった。吉田橋際の松屋は米軍用病院となり、ここから出る残飯を貰う人々の行列は絶えなかった。野沢屋はPXとなり、寿は宿舎に、不二家はGI用食堂で、ウインドーにみえるドーナツは垂涎の的であった。不二家の裏の方が「洋パン」のたまりになっていた。福富町はカマボコ兵舎で、若葉町が飛行場。伊勢佐木町二丁目弘集堂の辺りは大型カマボコの体育施設「フライヤー・ジム」となり、オデヲン座は第八軍に因んだ「オクタゴン劇場」となった。「ラッキーストライク」は甘く、日本の「ハッピー」はただ辛いだけの差のように、日本人の街は三丁目以降と野毛方面になった。日活はやはり「日活」として、花月は「グランド劇場」としてアメリカ映画の封切場となった。新築されたオデヲン座はアメリカ映画のロードショー館として格を誇り、木製ながら他の劇場より良い椅子を使っていた。レアルト劇場もアメリカ映画の封切りで、殊に女学生に人気があった。日本映画は、オリンピア劇場が出来るまでは現在のピカデリーのところにあった松竹だけであった。食物も衣料も不足していたがアメリカ映画だけは溢れていた。「我等が生涯の最良の年」や「オーケストラの少女」、「心の旅路」などせっせとみて歩いたのもこの頃である。

戦前、どちらかといえばお屋敷町的に落着いた雰囲気のあった野毛は一変した。現在は高速道路になっているが、桜川のほとりはカストリ横丁、クジラ横丁、クスブリ横丁と呼ばれる屋台街で、クジラのカツ、イワシの煮物、そしてカストリ（バクダンとも呼ばれた）が売られた。野毛通りは両側一杯に露店商が出店した。大部分は衣料品であった。伊勢佐木町側のアメリカ映画に対抗したのかどうか判らないが、マッカーサー劇場が欧洲映画封切場として開場した。その隣りに劇場として国際劇場が歌舞伎と松竹歌劇で開場。間もなく有隣堂も出店してGIオフリミットの日本人街が出来上った。桜木町を起点とすれば、駅を降りてまずカストリ横丁による食の充足、そして野毛通りにある露店等による衣、衣食足りて有隣堂で書、マッカーサー劇場で高尚なる（？）欧州映画等により礼節を知って野毛山の市役所に行くというわけである。

昭和二十四年の貿易博覧会以後、市役所は反町に移った。この頃、横浜駅の西口は鶴屋町寄りの新田間川の川辺りまで一軒の家もなかった。川際に七、八軒の屋台が並んでいてモツ焼きで酒を売っていた。朝鮮戦争が落着いてくると野毛に秋風が吹き始める。伊勢佐木町地区の接収が解除されだしたのである。かもめ座や野毛劇場が新築されて間もないというのに有隣堂は伊勢佐木町へ移った。桜川の埋め立てによりカストリ横丁は消滅し、これらの店と横浜駅西口の川際にあった店は桜木町デパートに収容された。関内はまだ関内牧場といわれていた。伊勢佐木町のフライヤー・ジムは横浜公園の中に、平和球場（ゲーリック球場）の脇に移転した。野毛の露店商の何％かは

キチンとした店を持つ旦那に納まった。この頃、街娼は日の出町駅から黄金町駅にかけて何十人となく出没し、黄金町から阪東橋を経て浦舟町・三吉橋方向、阪東橋から長者町五丁目へといくつものルートが出来上っていた。真金町、曙町、ガード下へ行く男たちを途中で捕えるために。待合・料亭のお客だった旧旦那衆は、財産税等のために没落し、GIに取入った特需成金らはキャバレーの風習を待合に持込んだ。芸者は三味線が弾けなくてもダンスが出来れば良かった。住宅事情も一因となって連れ込み旅館が一般化する。

遊廓にあった女と寝る前の儀式（酒や料理）は色あせて、諸事即物的に、安直になっていった。三業、二業の区別もなくなった代りに警官の臨検もなくなった。

ある彼女曰く

「あたしたちも人間だから、口には気をつけた方が良いよ。女房が妊娠中だからなんて言ったら絶対にモテないから」。またある時は、隣の部屋から女が入ってきて、

「あの野郎、床の中で警察手帳出しやがったから出て来ちゃった」。

それから二時間ほど女二人のオゴリで酒盛りをしたが、隣人は一人で終始大人しくしていた。時々咳払いはしていたが…。戦後、曙町でも、正月三ヵ日等は料金の他に祝儀を出した。半紙に包んで彼女の襟首へ入れるのである。すると彼女はネズミ鳴きをする。また金額によっては彼女は帯を前側で締めて、立ったままでリードする。これは江戸以来の芸者の伝統の名残りとのこと。戦後は年期勤めも薄くなった。真金町にいた女が街角に立っていたり、その次には曙町にいたりした。映画館で手を握ったら握り返された、その次は彼女の部屋にいた、結局時

図―2　接収当時～昭和27年頃の劇場所在地

図―3　昭和30年頃の劇場所在地

計がなくなったという人もいる。彼女らの多くは、売春防止法後一～二年の間に客と夫婦になったという。

防止法が施行される頃、伊勢佐木町の復興も眼につくようになり、映画館も最後の興隆期を迎える。市役所も現在地に建った。福富町・宮川町は遊廓代りのトルコ風呂地区になった。税務署が野毛にあった頃、あの近くのトルコ風呂でトルコ嬢曰く「一番嫌な客はお客と一緒に来る税務署の人」。横浜駅西口に商店街ができたが、多くの人は、あんなところにといって相手にしなかった。テレビの普及は着々と映画人口を喰い潰していった。

屋台のモツ焼きと焼酎が一番安かったのが何時の間にか大衆酒場の方が安くなり、屋台は女の紹介所のようになっていった。伊勢佐木町にビルが並び出すとビアホールが流行する。隆盛を誇っていた野毛の飲食店は活気を失い、映画館も一館一館と閉館したり格落ちしてきた。山を削って宅地にし、畠や田に家が並んでくると、横浜駅の乗換人口は桜木町駅を圧倒しだす。教育の普及は若年労働者（小僧）を消滅させ、マイホームのために共稼ぎが常識化してくる。女性の発言力が強くなり購買力を持たせる。ホームバーが流行し、各地にショッピングセンターができる。根岸線の開通は桜木町を単なる通過駅にした。県庁・市役所と桜木町・日の出町を結ぶ線中にあった野毛は大打撃を受ける。

西口の発展は、日の出町駅を、伊勢佐木町への買物客の駅としての役割を否定してくる。日の出町から松屋・野沢屋へ往復する時間で、西口でもう一軒デパートを歩けるのだから。その代り場外馬券の駅になった。

港座と関内芸者、羽衣座と関内芸者、日本橋の待合と長島座、真金町と横浜座これらと至近距離にあった伊勢佐木町、外貨を稼いでいたハンカチ女工に支えられていた賑座等を抱えていた伊勢佐木町は大震災で姿を消した。

真金町・曙町を後背地に、親不幸通りをすぐ裏に、福富町当りの銘酒屋、清正公の飲み屋に挟まれ、活動写真で子供たちを集め、職工層・自営業者を花月の実演で、インテリをオデヲン座で、寿・野沢・敷島座で家庭婦人を、朝日ニュースや大道芸人で一、二時間の閑が出来たセールスマン等を寄せつけ、市街電車・円タク・京浜急行で商圏を杉田、鶴見等に迄ひろげた伊勢佐木町は空襲で終りを告げる。

接収の痛手から立直った時、元町はニューモードのショッピングセンターとなり、西口は単位面積当りの売上げで日本有数を誇る街となり、これにはさまれて真金町、曙町、親不幸通りを失い、さらに、目ぼしい興行場もなくなった伊勢佐木町通りは、何を核にして発展していくのだろうか。トルコの乱立と、小型ピンクキャバレーの進出は、福富町地区を客引きの場所にし、その代りに軒並みに、七時にはシャッターを降す夕方までの健全な伊勢佐木町通りにした。

表通りは家族連れで、金持ちも、それほどお金がなくても一日楽しめたが、一歩裏通りへ行けば男だけが客であったのが伊勢佐木町の基本性格であったようだ。親不幸通りが目当ての者も、出かける時は「伊勢佐木町へ」と言って出かけた。夜おそくまで営業していたからそれも出来たのだが、今日、夕食後「一寸伊勢佐木町へ行ってくる」と家族に言ったらどういうことになるだろう。

【主な参考資料】
横浜市史稿風俗編、横浜沿革史
横浜の芝居（池田千代吉）
横浜演劇年代記（永島四郎）
資料横浜歌舞伎年代記（小柴俊雄）
横浜伊勢佐木町周辺の劇場と映画館の変遷（柴田勝）

〈伊勢佐木町在住・測量師〉